

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320160

研究課題名(和文) 近現代ロシアにおける公衆/公論概念の系譜と市民の「主体性(agency)」

研究課題名(英文) A Genealogy of Obshchestvennost' (the public) and Civic Agency in Modern and Contemporary Russia

研究代表者

松井 康浩 (Matsui, Yasuhiro)

九州大学・比較社会文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：70219377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円、(間接経費) 3,780,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀末に流通を始めたロシア語obshchestvennost' (公衆・公論・公共性)の含意や政治的・社会的機能の変遷に着目した本研究は、19世紀後半からソ連後期までの約100年間を対象に、様々な社会層による公共性を帯びた「市民的」活動を多面的に考察した。それを通じて、強力な国家と弱い社会のイメージで語られがちな近現代ロシアにおける国家・社会関係に新たな知見を提供した。なお、研究成果の一部は、本科研プロジェクトが組織した二つの国際カンファレンスに提出された複数の英文ペーパーにもまとめられている。

研究成果の概要(英文)：This study that focused on changes of the meaning and political and social functions of obshchestvennost'(the public), a Russian term, which had started to circulate in the late eighteenth century, examined multifaceted public and civic activities conducted by various social groups during approximately one hundred years spanning from the latter half of the nineteenth century to the late Soviet period. Through the work, it gave a new light to the state-society relations in modern and contemporary Russia, which has been informed by the image of strong state and weak society. A part of the research results was submitted as several papers written in English to two international conferences that this research group organized.

研究分野：ロシア・ソ連史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：近現代 公衆 公論 市民 主体性 エイジェンシー ロシア 国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

J・ハーバーマスの『公共性の構造転換』が1989年に英訳されて以来、「公共性/公共圏」の用語は、現代社会の分析概念としてだけでなく、歴史研究の重要なツールとしても世界的に定着をみた。ただ、ハーバーマスの言う市民的公共性が西欧近代をその理念型としたことに由来する一定の文化的バイアスとその汎用性に疑問符を付け、非西欧社会にこれが適応可能かどうかは議論の一つの焦点となってきた。しかし近年、ハーバーマスのバイアスを払拭し、西欧近代以外の社会、例えばイスラム圏などの宗教共同体に公共圏の起源を探る研究や、「ファシスト的公共性」論に典型的な非自由主義的公共性論等も展開されるようになった。本研究は、強い国家と弱い社会のイメージで語られてきた近現代ロシア史を対象にして、この研究潮流に竿を差すことを構想するものであった。

その際、ロシア語で「社会」を意味する *obshchestvo* の派生語 *obshchestvennost'* がそれぞれの時代でどのような含意をもち、機能したのかに着目するのはユニークかつ有効な方法になると考えられた。公衆、公論、世論、社会(団体)など多様な意味を含むこの言葉は、ハーバーマスの公共性論とも密接に関係する。しかし、ドイツ語の *Öffentlichkeit* に *public sphere* の英訳が当てられたことも一因となって、彼の議論が公共「圏」論として、つまり開かれた自由な言論「空間」をもつばら表象するのに対し、*obshchestvennost'* はやや異なるニュアンスを伴う。すなわち、この言葉は、人間「集団」、特に国家事業や公共活動に積極的に関与する「意識ある集団」を含意する傾向にあり、国家や政治社会勢力による働きかけに応じつつ、主体的な活動を展開する市民を指し示してきた。そしてそのことが、*obshchestvennost'* をキーワードとする本研究課題の意義を公共性/公共圏論との係わりにとどめず、もう一つの次元にも開いていくと考えられた。すなわち、近年、人文社会科学横断的な関心事となった「主体 subject/agent」や「主体性 subjectivity/agency」をめぐる議論との関連である。自由で自立した主体はありえないとしても、ポスト言語論的転回の動きにも触発される形で、構造的制約下でありながらも一定の自律性を時に発揮する主体の復権が図られ、歴史学でもその傾向は強まっている。呼びかけに応じて立ち上がる「主体」のイメージを随伴する *obshchestvennost'* は「構造とエイジェンシー」(ギデンズ)の相互構築性を的確に表現し、従って、この概念をキーワードに分析を進めることで、各時代のイデオロギーや価値体系等の構造的制約をうけつつも、同時に一定の利害やアイデアを持ち込む市民の「主体性」の現れを、近現代ロシア史の文脈で解明することが可能となるのではないかと。本研究は、以上のような構想を背景とするものであった。

2. 研究の目的

国家権力が社会を上から強力的に統治するイメージが現在でも支配的なロシアで、国家と民衆の間であって時に両者を媒介する「公衆」や「公論」の歴史的意義や役割はいかなるものだったのか。*obshchestvennost'* をキー概念に採用した本研究は、近現代ロシアの公衆/公論の存在感やその政治的社会的役割の具体像につき、19世紀後半からソヴィエト体制をはさんで現在に至る100年以上に及ぶ期間を対象に、多角的な考察を加えるものであった。その際、国家の官僚機構や地方の行政機関、政治的・社会的諸勢力等が、各種の政策や目標の実現に不可欠な公衆/公論の創出を図るべく、どのような働きかけを社会に向けて行い、それに応えた市民や知識人が、その過程でいかなる「主体性 agency」を発揮したのか、両者の協働とせめぎ合いの観点を交えて研究を進めた。本研究の最終目的は、以上の研究成果を英語の著作として出版し、世界的な研究コミュニティに向け発信することである。

3. 研究の方法

本研究グループは、19世紀後半の帝政末期から、1917年のロシア革命を挟んで、ソヴィエト体制の後半の時期にいたるおよそ100年間のそれぞれの時期を自身の専門領域とした8名のメンバー(研究代表者、研究分担者、研究協力者)から構成された。そこで、以下のような方法で、本共同研究に取り組んだ。

(1)対象時期の分担

各自の専門領域を生かして研究対象となる時期を分担し、本研究プロジェクトのキー概念が担当する時期でどのような含意を持ちえたのかを予備調査したうえで、全体の研究テーマに照応した各自の具体的な研究課題を設定し、各自で研究作業を進める方法を採用した。また、適宜ロシアや関係国でアーカイブ調査を行い、資料的基盤の拡大にも努めた。

(2)研究会の定期的開催

各自が進める研究作業を全体の観点から調整し、意見交換を図るとともに、問題意識や作業状況を共有するために研究会を定期的に開いた。研究会の際には、各自の研究報告及び討議に加えて、本研究の基本概念である *obshchestvennost'* をめぐる各種の議論やエイジェンシー論の整理を研究代表者が行い、それらをメンバーに提示することにより、本研究プロジェクトの理論的な基礎固めを進めた。

(3)研究成果のとりまとめと公表

研究プロジェクト2年目が終了した2013年3月9日・10日の2日間をかけて中間総括的な研究会を実施し、研究の進捗状況を確認したうえで、以下の2つの方法により、研究

成果を広く公表することを決めた。

本プロジェクトが企画・組織する国際会議の開催

各自が執筆した英語論文を編集した論文集の出版

4. 研究成果

本研究プロジェクトを通じて、以下のことを解明することができた。

(1) *obshchestvennost'* の歴史的機能

19世紀後半に、西欧派のリベラル知識人によって主に用いられた *obshchestvennost'* は、20世紀初頭、とりわけロシア革命前後の自発的な大衆運動が盛り上がりを見せた時期にはその使用が目立たなくなり、1920年代に入って、ソヴィエト政権が労働者や農民の自発性を「動員」しようとする文脈で意識的に再定義され、流通度を増したことが確認された。また、スターリン時代には、再度その使用頻度が落ちるが、スターリン死後のフルシチョフ期に、体制が「共産主義建設」を目指して「社会の自治」をスローガンに掲げはじめて以降、公文書やメディアでも頻発されるようになった。その中であって、1960年代後半から活動を活発化させたソ連の異論派が、世界の世論に自身の主張を訴えかける際に、政権とは異なる含意で *obshchestvennost'* の用語を用い始めたことが注目できる。

(2) *obshchestvennost'* とエイジェンシー

以上のように、この概念は、ロシアの近代化の過程で胎動した公衆や公論、市民社会的要素を表現する言葉であるにとどまらず、帝政ロシアであれソヴィエト体制下であれ、社会変革の理念を有するエリートやカウンターエリートがそのヴィジョンの実現に向けて社会に働きかける際に用いた戦略的な用語でもあった。本研究では、その働きかけに対して市民や一般の知識人がどのように呼応し、エイジェンシーを発揮したのか、その背後にどのような利害や考えがあったのかを明らかにした。

(3) 具体的な研究成果

以上の知見は複数の英文ペーパーにまとめられ、2013年10月13日と14日にそれぞれ催された以下の2つの国際カンファレンス（使用言語英語）に提出された。

ロシア史研究会大会パネル「ソヴィエトの公衆・公論・公共性——*obshchestvennost'* 概念を手がかりに」（明治大学）

「ソ連終焉をめぐる新たなパースペクティブ——後期ソヴィエト社会再考」（日本大学）

この二つの会議には、関係分野で卓越したモノグラフを著したアレクセイ・ユルチャク氏（UCバークレー）を報告者として招聘した。また、では、本研究プロジェクトメンバーからは浅岡善治、中地美枝が報告者として、河本和子が討論者として登壇し、松井康浩が司会を務め、主旨説明を行った。では、

松戸清裕が報告者として、巽由樹子が司会者として、松井が討論者としての役割を果たしている。

なお、現在、本研究プロジェクトの研究成果は、以下のような論文集（英文書籍）に取りまとめられつつある（海外の出版社に打診中）。

松井康浩編『国家と社会の接点 帝政ロシア及びソヴィエト・ロシアにおけるアプシチェストヴェンノスチと市民の主体性』（Yasuhiro Matsui ed., *Interface between State and Society: Obshchestvennost' and Civic Agency in late Imperial and Soviet Russia*）

第1章：ロシア批評と「失われた」中流階級のアプシチェストヴェンノスチ 1840-1890年（巽由樹子）

第2章：労働者ミリューから公共領域へ 1905年までの労働者のソシアビリテと労働者アプシチェストヴェンノスチ（土屋好古）

第3章：第一次世界大戦期におけるアプシチェストヴェンノスチの概念（池田嘉郎）

第4章：ニコライ・ブハーリンと労農通信員運動 プロレタリア独裁下のソヴィエト的アプシチェストヴェンノスチ

第5章：スターリン主義的公共性あるいはコミュニティ・プロジェクト？ モスクワ・フルンゼ地区の住宅組織と自主運営食堂（松井康浩・既刊論文を再収録）

第6章：スターリン時代のアプシチェストヴェンノスチとは何だったか？ 戦後ソ連の医療専門家の事例（中地美枝）

第7章：国家と社会の間で 「共産主義建設」期のソヴィエト的アプシチェストヴェンノスチ（松戸清裕）

第8章：フルシチョフ下の同志裁判所に見る公と私（河本和子）

第9章：国境を超えるアプシチェストヴェンノスチ 越境的エイジェンシーのハブとしてのソヴィエト異論派（松井康浩）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

松戸清裕、「共産主義建設期」のソ連における犯罪との闘いと身柄引き受け 国家と社会の「協働」の観点から、ロシア史研究、第93号、2013年、47-70頁、査読有

浅岡善治、〔史料紹介〕初期ソヴィエト検閲史料(3) 1931年の『機密該当問題一覽』、福島大学人間発達文化学類論集、第17号、2013年、1-15頁、査読無

浅岡善治、革命的言辞から体制的修辞へ——革命ロシアにおける煽動・宣伝活動の展開、ヨーロッパ・グローバル化と諸文化圏の変容研究プロジェクト報告書（東

北学院大学) 2012 年、255-266 頁、査読無

池田嘉郎、帝国、国民国家、そして共和制の帝国、クアドランテ、14 号、2012 年、81 99 頁、査読有

池田嘉郎、第一次世界大戦期ロシア帝国の衛生独裁——衛生・後送部門最高指揮官府の人員と構造、東京理科大学紀要(教養篇)、第 44 号、2012 年、245 263 頁、査読無

松戸清裕、「共産主義建設期」のソ連における国家と社会の「協働」、ロシア史研究、第 88 号、2011 年、44-63 頁、査読有

〔学会発表〕(計 12 件)

Yoshiro IKEDA, Autonomous Regions in the Eurasian Borderlands as a Legacy of the First World War, An International Workshop “Rethinking the First World War and Europe on its Centenary, Yo January 10, 2014, The University of Tokyo, Tokyo, Japan

Kiyohiro Matsudo, Between State and Society: Soviet Obshchestvennost' in the era of “Building of Communism,” 科研プロジェクトによるカンファレンス「ソ連終焉をめぐる新たなパースペクティブ 後期ソヴィエト社会再考」、2013 年 10 月 14 日、日本大学

Zenji Asaoka, "NEP and Sovetskaia obshchestvennost'," ロシア史研究会 2013 年度大会、2013 年 10 月 13 日、明治大学、東京

Mie Nakachi, What was Obshchestvennost' in the Time of Stalin? : The Case of the Postwar Soviet Medical Profession, ロシア史研究会 2013 年度大会、2013 年 10 月 13 日、明治大学、東京

Yoshiro IKEDA, Putting Together an Imperial Jigsaw Puzzle: How the Russian Empire was Envisaged in the Health Resort Boom during the First World War, The Fifth East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (ICCEES Asian Congress), August 10, 2013, Osaka University of Economics and Law, Osaka, Japan

巽由樹子(研究協力者)、近代ロシアの商業出版と評論家 V・V・スターソフ - 移動展派の普及についての考察、日本西洋史学会第 63 回大会、2013 年 5 月 12 日、京都大学

Yukiko Tatsumi (研究協力者), The Crossing of “City” and “Village” in P. Soikin’s Scientific and Religious Magazines, 1890s-1910s., Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies, Annual Convention, 2012 年 11 月 18 日, New Orleans (USA)

Mie Nakachi, Unintended Consequences of Postwar Pronatalist Policy: Abortion Regime, Divorce, and Falling Fertility in the Late Soviet Period., UC Berkeley Russian History Workshop, 2012 年 12 月 06 日, Berkeley (USA)

Mie Nakachi, The Gendered Experience of the USSR’s Great Patriotic War, Conference on “The Soviet Union and World War II” (招待講演), 2011.05.08, Paris (France)

Mie Nakachi, Replacing the Dead: The Politics of Reproduction and Demography in the Postwar Soviet Union, Russian History Workshop at Georgetown University(招待講演), 2011.09.06, Washington DC(USA)

浅岡善治、革命的言辞から体制的修辞へ——革命ロシアにおける煽動・宣伝活動の展開、東北学院大学オープン・リサーチ・センター公開フォーラム「危機の時代と『国民』のプロパガンダ——戦間期ドイツ、ロシア、フランス」(招待講演)、2011 年 9 月 16 日、東北学院大学(宮城)

Yukiko Tatsumi (研究協力者), The Representation of the Tsar and the Commercial Press in the Late Imperial Russia: a Study of Illustrated Journals and "Koronatsionnyi sbornik", British Association for Slavonic and East European Studies, Annual Conference, 2012.03.31, Cambridge (UK)

〔図書〕(計 12 件)

池田嘉郎、山川出版社、第一次世界大戦と帝国の遺産、2014 年、3-23, 166-190 頁

松井康浩、岩波書店、スターリニズムの経験—市民の手紙・日記・回想録から、2014 年、224 頁

巽由樹子(研究協力者)、池田嘉郎、松戸清裕、河本和子、山川出版会、新史料で読むロシア史(中嶋毅編)、2013 年、53 - 71、128 - 145、242 - 276 頁

河本和子、有信堂高文社、ソ連の民主主義と家族—連邦家族基本法制定過程、2012 年、264 頁

浅岡善治、日本経済評論社、20 世紀ロシアの農民世界(野部公一・崔在東編)、2012 年、153 - 189 頁

土屋好古、成文社、「帝国」の黄昏、未完の「国民」—日露戦争・第一次革命とロシアの社会、2012 年、350 頁

土屋好古、池田嘉郎、松井康浩、松戸清裕、河本和子、彩流社、ロシア史研究案内(ロシ

ア史研究会編入、2012年、83 - 97、113 - 164
頁

松井康浩、河本和子、東京大学出版会、ユ
ーラシア世界 公共圏と親密圏（塩川伸明ほ
か編入）2012年、1 - 42、189 - 216 頁

池田嘉郎、東京大学出版会、ユーラシア世
界 記憶とユートピア（塩川伸明ほか編入）
2012年、101 - 126 頁

松戸清裕、筑摩書房、ソ連史、2011年、253
頁

Mie Nakachi, Palgrave Macmillan, Golfo
Alexopoulos et al. eds., Writing the Stalin Era:
Sheila Fitzpatrick and Soviet Historiography,
2011, pp. 101-116

Дзэндзи Асаока, CIRJE, Graduate School of
Economics, the University of Tokyo, XX век и
сельская Россия. Выпуск 2. Под ред. Хироси
Окуда, 2012, pp. 110 - 129

6. 研究組織

(1)研究代表者

松井 康浩 (MATSUI Yasuhiro)
九州大学・大学院比較社会文化研究院・教
授
研究者番号：70219377

(2)研究分担者

土屋 好古 (TSUCHIYA Yosifuru)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：70202182

池田 嘉郎 (IKEDA Yoshirou)
東京大学・大学院人文科学研究科・教授
研究者番号：80449420

浅岡 善治 (ASAOKA Zenzhi)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80347046

中地 美枝 (NAKACHI Mie)
北海道大学・スラブ研究センター・共同研
究員
研究者番号：90567067

松戸 清裕 (MATSUDO Kiyohiro)
北海学園大学・法学部・教授
研究者番号：10295884

河本 和子 (KAWAMOTO Kazuko)
早稲田大学・政治経済学術院・助教（平成
24年度まで）
研究者番号：50376399
（平成25年度は、研究協力者）

(3)研究協力者

巽 由樹子 (TATSUMI Yukiko)
東北大学東北アジア研究センター
研究者番号：90643255